「日々の理科」（第 515 号） 2015（H27),12,-2

# 「ケヤキの大木に学ぶ（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

樹木は横から見ると全体の形がわかるが、根元から見上げると、枝のつきかたがよくわかるのだ。私は子どもたちに声をかけて、ケヤキの木を真下から見てごらん・・・と言った。

実に堂々たる巨木である。枝が何にも邪魔されず、四方に伸びている。雨が降れば、枝々が集めた雨水が、幹に集まって、効率よく根に送られるだろう。これも「ケヤキの知恵」の一つと言える。

子どもというのは、何もない場所でも、しっかりと遊びを思いついて、楽しむものだ。特に大きな木があると、いろいろな遊びが生まれる。このケヤキの周囲でも、鬼ごっこ、だるまさん、ハンカチ落としなどを楽しんでいた。

この日はよく晴れていたが、武蔵野台地では珍しく西風が強かった。ケヤキは梢から、絶えず葉を落としている。子どもたちはその様子に喜んで、舞い落ちる葉っぱを追いかけている。誰かが、「地面に落ちないうちに、おち葉をキャッチすると、幸せになれるって、おばあちゃんが言ってた。」と言う。私も同じ話を祖母から聞いた記憶がある。うまくキャッチできた２年生の女の子が、その葉を私に見せてくれた。

「先生、ほら見て！これネ、葉っぱとタネがついてるよ。」女の子はこう説明してくれた。先日の、大学構内スタンプハイクの時に、附属中学校前でひろったケヤキの種のことを覚えていたのだ。

確かに、葉脇にブドウの種のようなタネ（正確には果実）がついている。この状態で、空中を飛んできたわけだ。あ・・・なるほど！そうか！　　（つづく）